

平成 30 年 5 月 11 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01027

研究課題名(和文) 学習者要因に着目した学習経験自己評価表の開発と評価 初年次教育での学ぶ姿勢の育成

研究課題名(英文) Focused on learner factor Development and evaluation of learning experience self evaluation table: Cultivation of learning attitude during the First-Year Experience

研究代表者

仲道 雅輝 (nakamichi, masaki)

愛媛大学・総合情報メディアセンター・講師

研究者番号：90625279

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、パリッシュの「学習経験の要因モデル」とは、「環境要因」「学習者要因」の2要因があり、それらの要因にはたらきかけることで、生涯忘れがたいもしくはその後大きな影響を与える深い学びを経験するとしている。

今回2要因の内のひとつである「学習者要因」に焦点をあて、入学初年次に行われる新入生セミナーの受講学生を対象として、自身の学習経験を自己評価し、望ましい学習姿勢を身につけ、学習効果が向上することを目指し、学生へのインタビューおよび初年次教育に長年携わった教員を対象に、授業実践に関する半構造化インタビューを行い、「学習経験自己評価表」と「授業改善ヒント集」の第1版を完成させた。

研究成果の概要(英文)：In this research, Parish's "factorial model of learning experience" has two factors, "environmental factor" and "learner factor", and by addressing those factors, it is hard to forget the lifetime or has a great influence afterwards I am going to experience deep learning. Focusing on "learner factor" which is one of the two factors this time, self-evaluate their own learning experience for students who attend freshmen seminars to be held in the first year of admission, acquire a desirable learning attitude In order to improve the learning effect, we conducted semistructured interviews on class practice for teachers engaged in long-term interviews with students and first year's education, and compared "Learning Experience Self Evaluation Sheet" and "Lesson Improvement Tips Completed the first edition of the collection".

研究分野：教育工学

キーワード：学習経験の質モデル 初年次教育 学習者要因 インストラクショナルデザイン ID美学第一原理

## 1. 研究開始当初の背景

初年次教育では、高校から大学への“円滑な移行”を図るために、スタディ・スキル等に関する授業が行われ、各大学できめ細かな初年次教育が行われている。しかし一方で、移行がうまくいかず、入学後早期にドロップアウトする学生が常に一定数存在し、イギリスにおいても移行を難しくする要因に関する分析がされ、要因の一つに学習経験の質の問題が注目されている<sup>2)</sup>。

研究代表者は、過去3年間の初年次教育経験において、学生の受動的な姿勢を感じ、その原因は、授業内容を「学ぶ必要がある」あるいは「学ぼう」と思えない点にあると考えた。そこで、高校と大学の授業スタイルや課題の出し方の違い、先輩の経験談などを示すよう工夫し、徐々に学生の学ぶ姿勢に変化が現れた。この成果は先行研究<sup>3)</sup>において明らかになり、初年次教育で、意味ある学びが待っているという期待や、学ぶ必要があると思えることが、積極性につながるという結論に至った。研究代表者は「学習経験の質を左右する要因についてのモデル（以下、学習経験モデル）」(Parrish, P.)を学生の学ぶ姿勢の評価指標として活用した実践研究を進めてきた。

学習経験モデルは、学習経験の質を左右する要因を「学習状況に係わる要因」と「学生個人に係わる要因（以下、学習者要因）」の2要因でとらえており、初年次教育においては特に学習者要因の視点が重要であると考えた。鈴木<sup>4)</sup>は、学習者要因を「自ら何を目標として学習経験に参画しているのかをしっかりと意識し（意図）、この学習経験をよりよくするために貢献できることを求めて恥をかくことを厭わず（プレゼンス）、オープンな心で提供されるものを受け入れる心の広さ（開放性）、きっとこの学習体験から何か大切なものが得られるに違いないとの確信を持っている（信頼感）」と説明されていた。つまり、学習経験の質を上げるには、新しい学習環境（状況）の影響を受ける以前に、学生自身がそれらを活用して学ぼうとする姿勢であることが必要であると考えた。よって、初年次教育をより効果的なものとするために、学習経験モデルの学習者要因に着目し、学生が自身の学ぶ姿勢を自己評価する枠組みとして用いることとした。これまでの研究成果から、学ぶ必要があると感じさせるよう工夫した授業改善が、主体的に学ぶ姿勢の育成、つまり学習経験の質の向上に一定の効果をもたらすことが明らかになった。また、学習経験モデルの要因をもとにした質問項目への回答が、学生の学ぶ姿勢を評価する指標となり得ることが確認できた。学生が学習者要因を自己評価し、改善に向けた行動の参考とするには、より具体性のある質問項目とす

る必要がある。また、授業のどの部分が学習者要因の変化に効果的かが明らかになっておらず、具体的な学習方略の提示や授業構成の評価のためには、要因の構成要素（下位分類）から具体的方略を導き出す必要があると考えた。よって、学生が活用する「学習経験自己評価表」を開発する。また、教員が授業構成の評価にも使える「授業構成ヒント集」の開発と授業改善の支援を行う。

## 2. 研究の目的

質の高い学習経験は、その後の学習行動を促進するとされており、学習経験の質向上を支援することの教育的意義は大きい。初年次教育を受ける学生は、新たな学習経験を積み始める段階であり、学習に前向きに取り組もうと思える心の持ち方を学ぶ必要がある。

本研究は、パリッシュ<sup>5)</sup>の「学習経験の要因モデル」にある「学習者要因」に焦点をあて、おもな支援方略を明らかにし、学生が自己の学習者要因を評価するための「学習経験自己評価表」を開発する。自己評価表を用いて、学生自身が自己の学ぶ姿勢を評価し改善することで、望ましい学習姿勢を身につけ、学習効果が向上することを目指す。また、学習経験自己評価表をもとに、教員が学習経験を高める授業改善に使える「授業改善ヒント集」も作成し、授業改善を支援する。

## 3. 研究の方法

本研究は、3ヶ年で研究目標を達成するために、デザイン研究の手法を参考に、スパイラル的に拡充しながら進めた。

まずは、パリッシュの執筆した書籍および翻訳・解説書に示された要因の解説文を抜き出し、記述内容の統合と使用語句の精選を経て、学生要因に該当する部分を抜き出し、学習経験自己評価表および授業改善ヒント集の手掛かりとなる語句・文章を作成した。また初年次教育の新入生セミナーを受講した学生および初年次教育の科目を担当している教員へのインタビュー調査も実施した。同時に学習経験モデルに関する先行研究の調査も行った。

2年目には、学習経験自己評価表の第一素案を作成し、初年次教育での実践と評価・改善を行った。学生が学習経験の質を自己評価する「学習経験自己評価表」を用いて、授業実施前後での調査・分析を行った。また、「授業改善ヒント集」は学習経験自己評価表の実施結果も踏まえて、研究連携者等の指導・助言を受け、使用する語句や文章構成、内容等を見直した。

最終年度には、さらに実践を重ねるとともに、実践から得られた結果を素案に反映させ、「学習経験自己評価表」「授業改善ヒント集」の第1版として、実践結果との整合性を図つ

た。

### 3-1 学習経験自己評価表の開発

1) 学習経験に関する学生へのインタビュー  
学生の学習経験をもとに項目を構成することで、より实际的で評価しやすいものになると考え、インタビューを実施した。対象は、前年度の新入生セミナーで、筆者の担当科目を受講した学生で、同意の得られた4名で、方法は半構造化インタビューとした(120分)。インタビュー項目は、4要因で設定し、自分の学習姿勢に影響したと思う授業や教員のかかわりについて、具体的に話してもらうよう聴き取りを行った。音声データから、逐語録を作成し、意味のある文節で区切り、類似するものをまとめ、学習姿勢を示すものを選び、評価項目案を作成した。

#### 2) 教員が学習者要因に影響すると考える項目

自己評価表を作成するにあたり、学生が認識している項目のみで構成した場合、学習姿勢の習得を支援するツールとしては不十分である。そのため、教員が学習経験の質を高めると考える学習姿勢を追加した。方法は、以下のとおりである。筆者らは、長年初年次教育に携わる教員(1名)に対する半構造化インタビューにより、学習経験の質を高める教育実践を調査し、「学習経験の質を高める授業改善ヒント集」を作成した。このヒント項目から、教員が学生に身につけてほしいと考えている学習姿勢を示す項目を抽出した。ヒント集には、学習姿勢を示す項目以外に、授業方法の具体的な工夫(グループワークではメンバーに多様性をもたせるなど)および、教員自身の姿勢(できていることを褒めるなど)があり、それらは除外した。

#### 3) 自己評価表第一次案項目の決定

学生の項目と教員の項目を合わせ、重複を整理し、計30項目を決定した。自己評価表第一次案は、項目に、そう思う・ややそう思う・どちらでもない・あまりそう思わない・そう思わないで回答する5件法とした。

#### 4) 自己評価表第一次案を用いた調査

調査は、2016年度新生セミナー(ノートの取り方などのスタディ・スキルズを中心とした科目)で、筆者が担当する科目(6回)を受講した学生に対して、授業の最初(授業前)と最後(授業後)に実施し、学習者要因得点の変化を比較することで、初年次教育の学習者要因への影響を観察することを目的として実施した(対応のないt検定、有意水準5%)。

### 3-2 授業改善ヒント集の開発

主体的学習者の育成に向けて、学習者要因

を高めるための学習支援方策を調査し、実践に役立つ授業改善ヒント集を作成する。そこで、実際に初年次教育に携わる大学教員へのインタビューを行い、学習支援方策を抽出した。

#### 1) 対象者の条件

対象者は、大学での教育経験が5年以上あり、継続して初年次教育に携わった経験がある教員とし、次の選定方法により承諾を得られた者とした。研究・学習コミュニティ内で条件を満たす候補者に、研究目的等を記載した電子メールで依頼し、了承を得た対象者とメールで面接日程を調整した。

#### 2) 対象者の基本的事項

対象者は所属した大学で初年次教育科目を担当した経験ある専任教員である。

#### 3) データ収集方法

インタビューは、学習経験の要因モデルに関する論文を参照して作成したインタビュー項目をベースにした。インタビューは半構造化面接法(120~180分程度)で行った。

#### 4) インタビュー内容

インタビューにあたっては、Parrishの学習者要因の4要因に加えて、初年次教育科目の授業で普段工夫していることについても尋ねている。その理由は、要因についてのみ聞いた場合、対象者の中で、4要因に該当しないと判断されることで、実際には影響していると思われる学習支援方策を取りこぼすことがないようにするためである。そこで、普段の初年次教育科目の授業での工夫を広く聞く「普段の初年次教育科目の授業での工夫」という項目群を加え、授業実践に関する授業者の様々な取組みの意図なども含め、幅広く質問を行った。

#### 5) 分析方法

分析は、Parrishの学習者要因を既存の理論枠組みとして用い、先行研究<sup>6)7)8)</sup>を参考に、①記述全体を文脈単位、②1内容を1項目として含むセンテンスを記録単位とし、③個々の記録単位を意味内容の類似性に基づき分類した。

## 4. 研究成果

### 4-1 学習経験自己評価表の開発

第一次案を用いた学習者要因得点を比較したところ、授業前後で6つの学習姿勢が変化した。

#### 1) 授業前後での比較

対象者数は291名、回収率は授業前95.9%(有効回答数267)、授業後92.8%(有効回答数256)であった。無回答の項目がある回

答は分析から除外した。授業後に有意に上昇した項目は「学生同士で教え合うようにしている」、「授業で自分に何が身につくのかをわかった上で受けている」の2項目であった。低下したのは「専門分野に関連する科目かどうかを考えながら授業を受けている」、「授業でのグループワークは友人をつくるよい機会になる」、「授業から何かを学び取りたいと思っている」、「何か新しいことが学べるのではないかと思って授業を受けている」の4項目であった。

今後、他の科目での検証や、回答した学生への聴き取り調査など、さらに使いやすい自己評価表の作成に向けて改訂を進める。

#### 4-2 授業改善ヒント集の開発

分類の結果、100項目が抽出された。内訳は、意図20項目、プレゼンス35項目、開放性21項目、信頼感24項目となった。各要素の方策を見ると、意図では、外部講師や事例の活用、視覚教材の工夫に加え、新しいチャレンジの場を提示することで学生の内部から意図に該当する内的動きを喚起する働きかけを行っていた。

プレゼンスでは、好ましくない事例を提示し、事例と自分との比較をさせることで学ぶ必要があることに気付かせ、グループメンバーの多様性確保など周到な準備でグループダイナミクスを最大化し「ともにいるとbeing-with」を促進している。

開放性では、よくある事例の提示や作業時間を十分に確保、学習への不安の軽減などの学習環境の整備により、学習への心的開放性を高める工夫をしている。

信頼感では、評価方法やルールの明示、フィードバックや質問への対応を丁寧にする、学習成果の表彰など、教員の真摯な学習支援が信頼感を高める方策として実施されていた。

今後の課題として、現在のヒント項目をもとに、より汎用性の高い授業改善ヒント集に発展させていきたい。

#### <引用文献>

- 1)近田政博, 戸田山和久, 夏目達也他: 大学の学びを促進する全学新入生向け教材の開発—『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』の事例より, 名古屋高等教育研究, 7, pp125-145, 2007.
- 2)Yorke, M. and Longden, B.: The first-year experience in higher education in the UK: Report on Phase 1 of a project funded by the Higher Education Academy, The Higher Education Academy, 2007.
- 3) 仲道雅輝, 鈴木克明 (2012) パリッシュの学生個人に係わる要因を活用した初年

次教育(新入生セミナー)の効果検証. 日本教育工学会第28回全国大会発表論文集, 279-280.

- 4) 鈴木克明 (2009) 学習経験の質を左右する要因についてのモデル, 教育システム情報学会, 24 (4), 74-77.
- 5) Parrish, P. and Wilson, B. G.: "A design and research framework for learning experience", A paper presented at the 31st Annual Convention of the AECT, Orlando, FL. [Available online] [http://www.aect.org/pdf/proceedings08/2008I/08\\_18.pdf](http://www.aect.org/pdf/proceedings08/2008I/08_18.pdf)
- 6) Berelson B. 稲葉三千男他訳 (1957) 内容分析, みすず書房, 東京.
- 7) 川端亮, 真鍋一史 (2010) 国際文化交流機関の評価手法開発研究における諸方法, 関西学院大学社会学部紀要, 100号, 33-46.
- 8) 上野栄一 (2008) 内容分析とは何か—内容分析の歴史と方法について—, 福井大学医学部研究雑誌, 9 (1・2), 1-18.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3件)

① 仲道雅輝, 根本淳子, 竹岡篤永, 高橋暁子, 鈴木克明 (2016) Parrishの学習経験の質モデルの学習者要因に着目した学習経験自己評価表の開発, 日本教育工学会全国大会(大阪大学)発表論文集, 681-682.

② 仲道雅輝, 根本淳子 (2016) パリッシュの学習者要因に着目した授業改善ヒント集の開発, 初年次教育学会全国大会(四国大学)発表論文集, 70-71.

③ 仲道雅輝, 根本淳子, 竹岡篤永, 高橋暁子, 鈴木克明 (2017) Parrishの学習経験の質モデルの学習者要因に着目した授業改善ヒント集の開発, 日本教育工学会研究論文集, 17(4), 187-194.

[その他]

ホームページ等

<http://nakamichi.opar.ehime-u.ac.jp/research.html>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

仲道 雅輝 (NAKAMICHI Masaki)

愛媛大学・総合情報メディアセンター・講師  
研究者番号: 90625279

(2) 研究分担者

根本 淳子 (NEMOTO Junko)

愛媛大学・大学連携 e-Learning 教育支援センター四国愛媛大学分室・准教授

研究者番号：80423656

竹岡 篤永 (TAKEOKA Atsue)

国立明石工業高等専門学校

研究者番号：30553458

(3)連携研究者

鈴木 克明 (SUZUKI Katsuaki)

熊本大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：90206467

高橋 暁子 (TAKAHASHI Akiko)

徳島大学・総合教育センター・特任准教授

研究者番号：20648969

(4)研究協力者

市川 尚 (ICHIKAWA Hisashi)

岩手県立大学・ソフトウェア情報学部・准教授

授

研究者番号：40305313